

国際開発協力の事例分析による被支援者・支援者の変遷と相互作用にかんする一考察  
— ライフストーリー研究を用いたバングラデシュでの事例をもとに —

日本福祉大学大学院 国際社会開発研究科  
石坂貴美

「研究の目的と方法」

この論文の目的は、バングラデシュ人民共和国（以下、バングラデシュ）の青年・スポーツ省、青年開発局（Department of Youth Development 以下、DYD）にて染色のトレーニングを受講した地元の女性たちと、支援者として技術指導にあたった筆者双方の意識と行動の変化を事例として提示し、被支援者と支援者との間に生じる相互作用が、国際開発協力という文脈のなかでどのような価値を生み出すことができるかという点を明らかにすることである。筆者は「被支援者と支援者の相互作用」とは、両者の間に存在するさまざまな認識の「ズレ」を修正していく過程であると定義し、国際開発協力において、その「相互作用」により、「ズレ」が修正されることで、多様で複雑な社会関係の中にある人々の暮らしに沿った支援を実現していくことが可能になることを論じた。

筆者は青年海外協力隊員としてDYDにて染色の技術指導をおこない、「何もできない」と言っていた女性たちが、染色技術を身につけて見違えるように変化していった姿に接し、人がもつ可能性の大きさを知るとともに、ひとりひとりの背景や抱える問題が多様であることに気がついた。そして、彼女たちが生きているバングラデシュの社会の問題、ジェンダーおよび社会格差、社会制度の脆弱性などに目を向けるようになった。筆者の視点は「自分が指導した技術を活かして女性たちがどれほど収入を得られるか」というものから、「彼女たちの人生のなかで技術を習得することはどのような意義があるのか」というものに変化した。このように、女性たちの変化が支援者である筆者の視点や意識・行動の変化を引き起こし、支援の幅を広げることになった。

本論文では、ライフストーリー研究を用いて被支援者と支援者の変化の過程を事例として提示し、それらの事例を国際開発協力分野の研究に取り上げられている諸概念を用いて考察する研究方法を採用した。

DYD のコースを受講した女性たちに対して、ライフストーリー・インタビューをおこない、染色などの技術を身に付けた経験が彼女たちの人生に影響を与えていった過程を女性たちの変化とともに事例としてまとめた。同時に、支援者としての筆者の変化の過程についても提示した。この方法を採用することにより、量的データからは捉えることのでない変化の過程や関係性の変化を捉えることを試みた。そして、個々の多様性とそれぞれの女性と社会との関係から社会が抱える複雑な問題を描き出した。

さらに、それらの事例を「参加」「エンパワーメント」「ケイパビリティ」などの諸概念を用いて考察した。事例分析および考察を通じて、被支援者と支援者の間に存在するさまざまな認識の「ズレ」について注目し、被支援者・支援者間の「ズレ」を修正していく「相互作用」の重要性について述べ、その相互作用により国際開発協力において、多様で複雑な社会関係の中にある人々の暮らしに沿った支援実現につながることを論じた。

## 「論文の構成」

### 序章 はじめに

- 1 節 研究の目的
- 2 節 研究方法
- 3 節 研究の構成と概要

### 第1章 バングラデシュの概要と女性の概況および筆者の関係

- 1 節 バングラデシュの概要
- 2 節 バングラデシュの社会と女性
- 3 節 青年開発局の目的と筆者の役割

### 第2章 青年開発局の生徒たちの変化と筆者の役割の変遷

- 1 節 事例研究方法
- 2 節 バングラデシュの社会の中で制限される女性の行動
- 3 節 死別や離婚による不安定な立場
- 4 節 社会制度・保障の欠如
- 5 節 人間の尊厳をもとめて
- 6 節 家族の関係性の変化
- 7 節 障害を持った息子のために 家庭の問題と筆者の活動の広がり
- 8 節 知恵と自信がもたらす可能性
- 9 節 自己表現や創造性を求める生徒たち
- 10 節 事例 16 (Cp) もうひとりの支援者
- 11 節 生産者組合について
- 12 節 筆者の役割と変化 支援者・技術指導から人生相談まで
- 13 節 2章のまとめ

### 第3章 事例分析および先行研究考察

- 1 節 カテゴリー化の弊害からの解放 被支援者と支援者の相互作用の重要性
- 2 節 エンパワーメント概念に照らし合わせて
- 3 節 ケイパビリティから被支援者と支援者の相互作用を考察する

### 第4章 おわりに

- 1 節 結論
- 2 節 今後の課題
- 3 節 おわりに 支援者として多様性とどのように向き合い、寄り添うのか

## 「論文の概要」

1章では、バングラデシュの社会の概要について触れた。特に2節では、第2章で扱う女性たちの事例を社会全体の状況と照らして相対化させるために、先行文献を用いてバングラデシュの女性が置かれている状況について詳しく述べた。その状況は、地域や家庭の経済状態、家庭内でのジェンダー観によっておおきく影響を受け左右されている。伝統社会、文化、慣習、宗教による影響や家族・結婚制度について述べ、女性の経済状況、健康・栄養、教育にかんするデータを提示し、さまざまな側面においてバングラデシュの女性は社会的に弱い立場にあることを明らかにした。3節では、筆者が青年海外協力隊員として赴任していたDYDの活動を紹介し、支援者としての筆者の活動や役割について述べた。

2章では、1節にて、ライフストーリー研究による事例を提示するために、ライフストーリー研究について述べ、事例の研究方法について詳しく述べた。

2節から9節では、DYDで染色を習った女性たちの変化の過程を事例として提示した。2節では女性の行動が社会の中で制限されている事例をとりあげ、3節では離婚や夫の死別、持参金の問題や家庭内暴力などによって、女性たちは不安定で弱い立場にある事例を提示した。4節では、社会制度・保障の欠如により、能力や機会を活かすことができず、厳しい状況に追いやられている女性の状況を取り上げた。5節では、社会的に弱い立場にいる女性たちが技術を身に付けて収入を得ることを手段として、人間の尊厳を求めて活動し、変化していく過程を取り上げた。事例の中の女性たちは、つらい経験を乗り越え、尊厳をもった人間として夢を持ち続けたいと願っている。6節では、何ひとつ自分の考えを主張することもできず、何もできないと語っていた女性が、技術を身に付けて起業し、多くの女性たちの収入向上に貢献するに至った事例を取り上げた。その変化は「妻が夫に従属する」という家庭内の関係性を変化させ、自分の意思をはっきりと持ち、家庭内の事柄を夫婦で話し合っって判断・決定をする「共に助け合いながら生きていく」という新たな関係性を築きあげていた。7節では、障害を持つ息子のために技術を身に付けた女性の事例において、筆者が染色技術だけでなく、積極的に家庭の問題も取り上げて支援をおこなった例を提示した。8節では、被支援者と支援者の意識の「ズレ」を表す事例として、支援者である筆者の意図に反して、手に入れた機会を有効に活用している女性の活動を取り上げた。9節では、技術を活かして製品を作り販売することに対して、収入だけでなく、自己表現や創造性を求めている女性たちの事例をいくつか提示した。

10節ではDYDの職員であり、卒業後も生徒たちの活動を支え続けているDYDの職員（以下、カウンターパート）について述べ、11節では、カウンターパートが中心となり、卒業生たちと始めた生産者組合の成り立ちおよび活動内容について取り上げた。組合は組織としては発展途中にあるが、女性たちにとって貴重な活動や交流の場となっている。そして、12節において、支援者としてかかわった筆者の役割の変遷について述べた。技術指導による収入創出を支援目的として赴任した筆者が、変化していった女性たちとかかわる中で、技術指導だけでなく女性たちの取り巻く環境にまで視野を広げていき、「人生相談」という役割を加えていった過程について述べた。

以上、2章では事例を提示することにより、以下の4点を明らかにした。①女性たちは、「技術を身に付けて収入を得る」ことを「手段」として選択し、それぞれの夢や目標や生きがいなどを追い求めるためにDYDに通っていた。②女性の変化は、経済的なことだけ

でなく、精神的なことや行動の広がりや家族との関係性においても見られた。③変化した女性たちは、活動の範囲を広げ、他の女性を助けることに生きがいを感じていた。④生徒の変化に影響を受けて、筆者は支援者活動の枠を広げていった。

3章では、2章で提示した事例を分析し、被支援者と支援者の相互作用が国際開発協力の中でどのような価値を生み出すことができるかについて論じた。

1節においては、カテゴリー化の弊害について述べ、被支援者と支援者の間に生じる認識の「ズレ」について指摘し、「参加」の概念を用いて「参加の発想の転換」の必要性について論じた。国際開発協力の事業の中で人々をカテゴリー化し、支援の目的を設定することにより、支援者には、そこに生きている人々の状況、暮らしの多様性が見えなくなる弊害が生じることがある。カテゴリー化の弊害を乗り越えるためには、被支援者／支援者間のさまざまな事柄に対する認識の「ズレ」を明らかにし、それを意識化することが必要であり、その「ズレ」をお互いに修正していくことにより被支援者と支援者の相互作用が生み出されていくことを論じた。

2節では、「エンパワーメント」概念を取り上げ、自己の確立や人間の尊厳回復や社会関係の変革などの量的には計りきれないエンパワーメントの要素に着目し、人々の意識や行動の変化に注目する必要性について述べた。さらに、支援者の支援目的を人々のエンパワーメント・プロセスにおける手段として捉えることについて述べ、それが、被支援者／支援者間の「ズレ」を認識することを助け、両者の相互作用を生み出していくことを論じた。また、「語る」と「聞く」という相互行為が生み出すエンパワーメントについて論じた。

3節では、「ケイパビリティ」の概念をもとに事例を分析し、筆者の支援者としての課題について明らかにした。「ケイパビリティ」の理論は、被支援者／支援者間の「ズレ」を修正し両者の相互作用を生み出していくために、支援者が人々の多様性にどのように向き合ながら活動をすればよいのかという問いに対して多くの示唆を与えるものである。多様な人々が複雑な社会関係や状態の中で暮らしている状況を捉え、その人がしうることやなりうることの焦点を当るケイパビリティの視点を持って支援に取り組むことで、人々が必要としていることや支援すべき事柄がより明確になること論じた。

4章では、結論を述べ、今後の課題について触れた。本論文では、『被支援者と支援者の相互作用』とは、被支援者と支援者の間に存在するさまざまな認識の『ズレ』を修正していく過程であり、国際開発協力において、被支援者と支援者の間の相互作用が生み出す価値とは、多様で複雑な社会関係の中にある人々の暮らしに沿った支援を実現していくことであると結論を導き出した。そのためには、個人のレベルで認識された両者間の「ズレ」を修正していくことに対して、組織レベルにおいても柔軟に対応をすることができる組織の体質づくりが必要とされる。また、被支援者・支援者間の相互作用を生み出していく上で多くの示唆を与えるとして筆者が注目しているケイパビリティの概念は、さまざまな問題に対して常に普遍的な解答を提供するものではない。その時代や活動をおこなう地域などの社会的文脈に合わせて、人々のケイパビリティを広げる支援を進めていくことがそれぞれの支援者に与えられた課題であることを指摘した。さらに、本論文の事例に取り上げたバングラデシュの女性たちについては今後も調査が必要であり、筆者は女性たちが始めた生産者組合の活動に注目し、その一支援者としてかわり続け、これからも女性たちの状況やその変化を調査していくことを今後の研究課題として述べた。